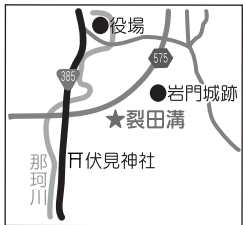


ながわ

那珂川町郷土史研究会

裂田溝19

嘉七橋周辺



寺山田下流にある「嶋添堰①」の南側は「ラップストーン工法」による真新しい石垣が築かれ、秋の陽光に輝いて川幅をいっそう大きく写し出しています。心配された水不足も雨乞い神事のおかげでようやく、周辺の田んぼは稲穂が黄金色に波打ち、豊作が待たれています。田んぼへ入る水の入口を「水口」、田んぼの水の出口を「落水口」といいます。この石垣沿いには、3カ所の落水口が造られています。南側の田んぼに必要な水は共栄橋下の椿井堰から取水され、伏見神社裏から山田団地北側の田んぼを巡ってこの落水口へと流れ込みます。そばには雨水などが流れ込む

排水路があり、その下流に今回の工事でできた「橋13木の橋」が裂田溝をまたぐ形で架けられています。「木の橋」は、長さ6.8m、幅1.3m、欄干の高さ1.1m。欄干には各所で見掛ける擬木ではなく、防腐処理をした県内産のスギが使われ、風情のある造りとなっています。橋を渡る小さな子どもは両手をいっぱい広げ、欄干の手触りを確かめています。また、橋の途中で立ち止まっては水面に映る魚を指差して話し込む親子連れなど、あちこちでほほえましい風景に出会えます。

「木の橋」の下流に「嶋添堰②」があります。今回の改修工事で、以前の古い6本の石柱も新しくなりました。ここでせき止められた水は、手前にある開閉式の「取水口ゲート」から取り入れられ、道路の下を横切り北側一帯の田んぼへ送水されます。「木の橋」から「嶋添堰②」の間は川底も一定しており、ちよつとしたプールのようになっています。水辺で育つ子どもたちは、何でもない川べりも遊び場に変え、今年の夏も元気な笑い声を溝に響かせていました。

幅1.3m、欄干の高さ1.1mで、「橋13木の橋」と同様に県内産のスギが使われています。

この辺りは昔から珍しい草花が自生し、町の鳥「カワセミ」の俊敏な姿も時折見ることが出来ます。また、シラサギ（白鷺）やマガモ（真鴨）のつがいや仲良くエサをついばむ様子も見られ、心が和みます。今回の改修工事の中で、貴重な植物や生き物が生息する水辺を残すための環境保護活動も始まり、各方面の人たちの提言や努力が行われています。今年の1月、那珂川の環境を考える会や福岡大学の先生、学生ボランティアグループ「はか

れます。「橋14木の橋」付近から北側に目を移すと、収穫を待つばかりの田園風景が広がります。そろそろ稲刈りも近まりますが、稲刈りの時期は裂田溝の水管管理者「唐戸番」さんや各堰の「水守り」さんの苦労が実るときです。広がる田園風景の中、ポツカリと浮かんで見えるのは「オニガシマ」と言われている共同墓地です。

寺山田の集落を最初に結ぶ橋が「嘉七橋」です。名前の由来などは定かではありません。この橋は改修工事で架け替えられました。新しくなった橋にもその名が残されるそうです。旧橋の石材は、岩門城跡の天狗岩から切り出されたと言われています。使われていた石は、近くにできる公園などでの活用が望まれます。

次号は、「嶋添堰③」から紹介します。

コースメモ

- おてみなくち 47. 落水口 3ヶ所
- 48. 排水路
- 49. 橋 - 13 (木の橋)
- 50. 取水口 - ⑤ (嶋添堰 - ②)
- 51. 排水路
- 52. 橋 - 14 (木の橋)
- 53. 橋 - 15 (嘉七橋)
- 次号へ 54. 取水口 - ⑥ (嶋添堰 - ③)

史跡メモ

オニガシマ (共同墓地)

寄り添いし川面に浮かぶ
真鴨二羽
夕ぐれ時に疲れ癒しね
マサ子



新しく架けられた木の橋
裂田溝で最も川幅の広いところです



新しくなった嘉七橋



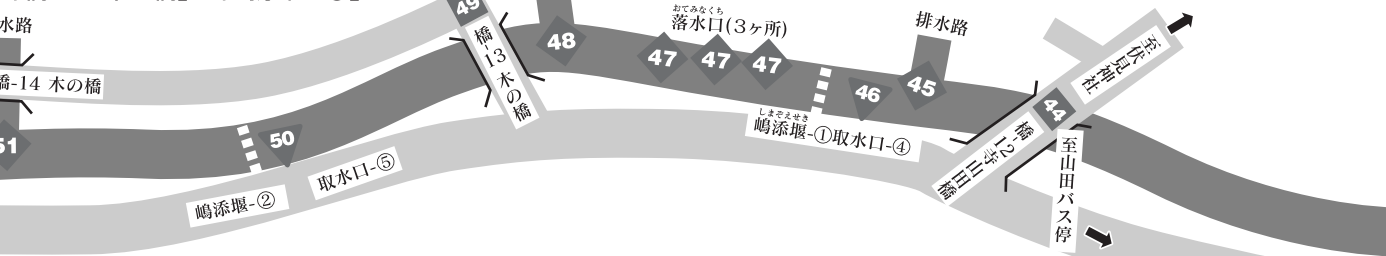
旧嘉七橋に使われていた石



田んぼの中にポツカリ浮かぶオニガシマ (共同墓地)



新しく架けられた
「橋-13木の橋」と「嶋添堰②」



「嶋添堰②」付近
子どもたちの格好の水遊び場です



「嶋添堰②」の石柱と取水口ゲート
石柱の上流側の両脇にある切り欠きに板を渡して仕切りをし、上流側の水位を上げ、取水口ゲートを開いて北側の田んぼへ送水します



1月に行われた魚の生息調査の様子